	学校名：東京都立六郷工科高等学校	● 実践教科等：地理 A
	氏名：田中 駿一	● 時間数：7 時間
Viet Nam	[担当教科：地理歴史 公民]	● 対象生徒：高校 2 年生
		● 対象人数：16 人

1 単元名

課題に対して「SDGs」を通して考える“私のアクションプラン”

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ①国際的な諸課題やベトナムと我が国の問題を相対的に比較・検討することで理解を深め、その中で望ましいコミュニティ形成のために自身ができることを考える力を養う。
【批判的に考える力】【多面的・総合的に考える力】【進んで参加する態度】
- ②フットランゲージやアクションプランを作成することを通じて、他者の考えをしっかりと聞き、また自身の考えや思いを他者に伝達できる力を養う。
【コミュニケーションを行う力】【他者と協力する態度】

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る | 2 子供の多様な考えを引き出す |
| 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する | 4 考えるための教材を見極めて提供する |
| 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する | 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する |
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元は地理 A の学習指導要領(1)「現在世界の特色と諸課題の地理的考察」に含まれる領域である。そのねらいは、環境、資源・エネルギー、人口・食料及び居住・都市問題を地球的及び地域的視野からとらえ、地球的課題は地域を越えた課題であるとともに、地域によって現れ方が異なることを理解させ、それらの課題の解決には持続可能な社会の実現を目指した各国の取り組みや国際協力が必要であることについて考察させることである。

(2)児童生徒観

当該クラスは 2 年次の選択科目のクラスである。地理への興味関心があって選択した者、逆に他教科と相対的に比較して選択した者など、受講の動機はさまざまである。4 月からこれまでの様子を見てみると、授業に対しては静かに取り組んでいる。プリントや課題に対しては比較的、積極的に取り組んでいる。ただ、設定時間が金曜日の 6・7 時間目であることから集中力が途切れやすかったり、授業者の問いの設定の稚拙さから、問いかけに対する反応が鈍かったりする場面がある。授業者としては、2 コマ連続するからこそその学習時間の特性をうまく活かしたいと考える。そのため学習内容のインプットの時間、学んだことを共有したり、身近な問題との関係を考えたりするアウトプットの時間を切り分けた授業デザインを行っていききたい。当然のことであるが、生徒の生活圏と関連させて、学んだことと実生活のリンクを意識できるような授業設計を行っていく。

(3)指導観

授業は自作プリントと教科書を活用している。授業冒頭では、単に情報を伝達するだけでなく、「KP 法」とよばれる紙芝居プレゼンテーション法を用い、B4 用紙にキーワードや簡単なセンテンスを黒板に貼る作業を通じて説明し、授業冒頭において本時の枠組みや概要を大まかに掴んでもらう。

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

また授業内では学習者が感じたこと、考えたことを共有できるような場を設定する。そこから振り返りでは OPPA シート(One Page Portfolio Assessment)を活用し、形成的評価の観点から、生徒の授業前と授業後の学んだことの比較や変容、さらに単元全体を通しての自身の変化を省察する時間を設けていく。

5 評価規準

観点	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 技能	エ 知識・理解
評価規準	・ベトナムにおける JICA の活動、ODA の役割などに対する関心と問題意識を高め、それを意欲的に追究している。 ・ベトナムの抱える課題について日本との結びつきの様子を捉える技能を身に付けようとしている。	・SDGs の考え方やベトナム、日本との関連性を考察し、そのアプローチに向けて、多面的・多角的に追究している。 ・学んだことや自身の考えを、振り返りを通じて、言葉で表現することができる。	・SDGs 目標とベトナム、日本の課題を表す写真とその結び付きの考察や考えをまとめたりしている。 ・相手に対してわかりやすい言葉で考えを伝えるように工夫することができる。	・ベトナムにおける JICA の活動、ODA の役割を認知し、その知識を身につけている。 ・SDGs 目標とベトナム、日本の課題の関連性を理解し、その知識を身につけている。
評価方法	①机間指導における観察		②ワークシート	④発表など
	③OPPA シート(One Page Portfolio Assessment)			

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	ベトナムという国での体験・経験	ベトナムの国としての現状、その雰囲気を追体験し、理解する。	導入：日本が抱える課題についてどのようなことを知っているかを OPPA シートに記入する。 展開：①KP 法によって本時の概要をつかむ。 ②ベトナムの様子を教師海外研修での情報を軸として、パワーポイント等から認知する。 ③個人が考えたことをペアやグループで共有する。 まとめ：個人で考えたこと、感じたことを相手に伝える。
2	日本の ODA と世界的諸課題とは？	日本の開発援助の様子や世界的課題に対して、興味関心をもつ。	導入：ベトナムにおける ODA として関わった場所の写真を提示し、その施設やインフラの意義を考える。 展開：①KP 法によって本時の概要をつかむ。 ②ベトナムにおける日本の ODA の取り組みについて理解する。 ③世界的諸課題の目標である SDGs の考え方について認知する。 まとめ：授業で考えたこと、感じたことを振り返りシートに記述する。
3	ベトナムが抱える課題・問題とは？	ベトナムが抱える問題・課題などを理解する。	導入：KP 法によって前時の復習と本時の概要をつかむ。 展開：①SDGs 目標の「3 すべての人に健康と福祉を」、「8 働きがいも経済成長も」、「12 つくる責任つかう責任」について理解を深める。 ②ベトナムの課題や問題をフォトランゲージで何を表しているのかを小グループで検討する。 ③出てきた考えを共有し、情報を考察する。 まとめ：個人で考えたこと、感じたことを相手に伝える。

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

4	コーヒーカップの向こう側	コーヒーの視点からSDGsを考える。	導入:KP法によって本時の概要をつかむ。 展開:①コーヒーがどのような環境・地域で生産されているのかを理解する。 ②コーヒーの生産とSDGsを関連づけ、どのような問題が孕んでいるのかを考察する。 まとめ:授業で考えたこと、感じたことを振り返りシートに記述する。
5	日本が抱える課題・問題とは?	日本が抱える問題・課題などを理解する。	導入:KP法によって前時の復習と本時の概要をつかむ。 展開:①SDGs目標の「3 すべての人に健康と福祉を」、「8 働きがいも経済成長も」、「12 つくる責任つかう責任」について理解を深める。 ②日本での課題や問題をフォトランゲージで何を表しているのかを小グループで検討する。 ③出てきた考えを共有し、情報を考察する。 まとめ:個人で考えたこと、感じたことを相手に伝える。
6	理想のコミュニティとは?①	持続可能な社会を実現するための理想のコミュニティはなにかを考える。	導入:これまで学んできたベトナム、日本の課題について確認する。 展開:①日本がSDGs目標で未達成とされている4分野(目標5、12、13、15)について、その現状とあるべき理想を個人で検討する。 ②小グループ内において、それぞれが考えた現状とあるべき理想を共有する。
7	理想のコミュニティとは?②	持続可能な社会を実現するためのアクションプランを他者に伝える。	展開:①小グループ内において、それぞれが考えた現状とあるべき理想を共有する。 ②現状と理想の考察から、それぞれがコミットするSDGs目標とそのアクションプランを記入し、共有する。 まとめ:授業で考えたこと、感じたことを振り返りシートに記述する。また、日本が抱える課題についてどのようなことを知っているかをOPPAシートに記入する。

7 授業事例の紹介

小単元名【ベトナムが抱える課題・問題とは?】

(1) 指導案

(ア) 実施日時 平成29年 11月17日(金)第6限

(イ) 実施会場 2年B組 HR教室

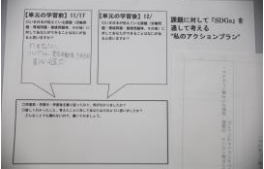
(ウ) 本時の目標

- ① ベトナムが抱えている課題や問題を認識し、その課題・問題点を考察する。
- ② ベトナムが抱えている課題や問題をSDGsの3つの目標との関連性を考察し、他者に伝えることができる。

(エ) 指導のポイント

- ・KP法で前時の内容をつかむとともに、視覚的にSDGsの内容や課題の写真の内容を理解する。
- ・グループ活動において、話し合いが促進するような声かけや支援を行う。
- ・学習者の意見とともに、授業者からの視点も提示し、それらを統合した形で課題を捉えさせ、振り返りで、考えたことを外化させる。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
5分	導入	<ul style="list-style-type: none"> ・本テーマの目標を認知する。 ・前時の内容の振り返りを行う。 	一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマをB4用紙で明示する。 ・前時で学んだことの簡単な内容を全体に問いかけながらKP法において説明する。SDGsについては特に本単元で主として扱うものをメインに説明する。 	ベトナムの国家事情や JICA の取り組み、日本の ODA 活動が社会にどのような影響を与えたのか接続性をもって理解している。【発問】
35分	展開	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGs 目標の「3 すべての人に健康と福祉を」、「4 質の高い教育をみんなに」、「8 働きがいも経済成長も」、「11 住み続けられるまちづくりを」等について、事例をもとに理解する。 	一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の「うな井」の例の復習、生徒にとって身近な事例から取り上げるように留意する。 	
【問い】4枚のベトナムの写真はSDGs目標(主に3,4,8,11等)のどれに該当すると考えますか？					
		<ul style="list-style-type: none"> ・4枚のベトナムの写真を確認し、SDGs目標のうち、どれに該当するのかをグループで検討する。 ・SDGs目標を検討したものをグループで共有する。 	グループ活動	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で話を共有できているか机間指導を行いながら、生徒の様子を観察する。 ・グループの考えを集約していき、板書する。また、それに応じて補足を加えていく。 	課題や振り返りをするにあたり、他者と相談したり、前向きな態度で取り組もうとしている。【観察】
【問い】4枚のベトナムの写真はどのような写真ですか？どのような情報が読み取れますか？					
5分	まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・4枚の写真を確認し、どのような写真で何を示しているかを考え、グループで検討する。 ・グループで検討したものを全体で共有する。 ・授業者のレクを聞いて、わかったこと・気付いたことを記入する。 ・本時で学んだことの振り返りを行う。 	グループ活動 一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で話を共有できているか机間指導を行いながら、生徒の様子を観察する。 ・グループの考えを集約していき、板書する。また、それに応じて補足を加えていく。 ・本時の目標に立ち返り、SDGs目標とベトナムの出来事の間を省察させる。 	自身、もしくは他者と協働しながら課題を解くことができる。【ワークシート】
			一斉		課題を考えるにあたり、自身の考えを文章にして適切な内容で表現することができる。【ワークシート】

(2) 授業の振り返り

指導計画の段階において、学習者の授業内容そのものに対する興味関心や他者との協同学習に主体的に取り組めるかという点において、不安要素が多々あった。しかし、授業が展開していくにあたって、ベトナムのいま、日本・ベトナム双方の課題や問題、SDGs を通してみた課題など多岐にわたった学習内容に高い関心をもっていたと考える。また、協同学習については、相互に意見交換をし合っている班もあった一方で、授業者がファシリテーションを行なったり、学習者を指して発言を促したりしないと意見交換が活発にならないなどの班も見られた。

指導計画では、4枚のベトナムの写真を確認し、SDGs 目標のうち、どれに該当するのかをグループで検討する課題を設定した。また、問いでは、「4枚のベトナムの写真はSDGs 目標(主に3,4,8,11等)のどれに該当すると考えますか?」としたものの、授業者が予想していた目標とは別の目標とのつながりを書く学習者が多かった。視点が拡散した面においては、広い見方をしていたと考えられるが、まずは限定した中での目標をしっかり理解し、課題と正対させることも欠かせない。今回は、SDGs 目標を実際の複数の課題と繋げる初めての取り組みだったので、冒頭の問い立てで、目標を限定した形であることを強調して伝達すれば、目標と課題を深く考察できたのでは、と考える。

後に、課題とSDGs 目標の繋がりを全体共有し、授業者からの解説をした。しかし、見方が拡散していた面、意図した目標に関する情報について、十分な解説時間をとれなかったのも反省点である。

(3) 使用教材

- ・『高等学校 新地理 A』(帝国書院)
- ・『コーヒーカップの向こう側』(開発教育協会)
- ・朝日新聞「教えてSDGs」2017年5月12日付朝刊,13(7)



(4) 参考資料等

- ・『SDGs と開発教育:持続可能な開発目標ための学び』田中治彦 他 学文社(2016)
- ・『SDGs 2030年までのゴール』日能研教務部 日能研(2017)
- ・『一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性』堀哲夫 東洋館出版社(2013)

8 単元を通じた児童生徒の反応/変化

今回の実践では、生徒の変化を大きく感じることができた。その理由として、本実践においては、毎回の授業で振り返りを行う「大福帳」と実践前と実践後で、生徒の変容を看取る「OPPA シート(One Page Portfolio Assessment)」を活用した。

大福帳では、その日学んだ授業のタイトルをつけたり、感じたことや考えたこと、疑問点などを記述したりし、授業者がシートにフィードバックをする。また、OPPA シートでは、単元の学習前と単元の学習後で同じ問いをし、学習前・中・後での変化を記述する。そこでは、同じ問いに対して、学習前では、既有知識を単語で書くのみだったが、学習後ではこれまでに知ったことを整理して記述したり、学んだことをもとにして自身の考えを書くなど、記述量や知識量に変化が見られた。ここでは、学習後の振り返りを部分的にはなるが、何点か紹介したい。

「今まで自分で日本の環境・世界の環境などを考えることがほとんど無かったけど、『SDGs』を学んでから、学習前と学習後では考える内容も変わった」

「日本の将来や日本がいま抱えている問題、また日本が今どのような状況下においてどのようなことをしなければならないかなどを学びました。一人一人が意識することで変えられると思いました。自分たちが今後どうしていけばいいのか真面目に考えなければならないと思った」

「大きな事をする必要はなくて、一人一人が小さな事をつみかさねれば大部分の目標は出来る、ということがわかりました」

「SDGs というものを授業で学んで発展途上国だけでなく、先進国もその目標を達成することにつとめることができるということ、そして日本がSDGs の目標を達成できていないこと、達成するにはどうすればいいのかということが分かった」

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

今回の実践では、ベトナムと日本の課題・問題を漠然と捉えるのではなく、SDGs の観点から捉えさせることにした。大きな成果としては、学習者にとって、ベトナム、日本それぞれの課題が 17 の目標の何に位置づいているのかがわかり、かつ、SDGs が発展途上国の問題ではなく、先進国も関わりのあることだと認識できたことだと考える。また、アクションプランを通じて、自分自身もできる行動を示せたことで、SDGs を、「国連が定めた遠い世界のもの」ではなく、自分たちにもコミットできる問題であるということと捉えられたことも大きいと考える。

一方で、生徒が示したアクションプランが果たして実行されるか、ただのその場しのぎの宣言になっていないか、という問題もある。環境問題や国際社会問題に対して個人がコミットできる範囲はそう大きくはない。そして全体的に見ていけば個人の活動が問題全体に与える影響も大きくはないことも事実である(時折そうではない場合もある)。だからといって個人ができることを放棄することには繋がらない。授業では、「僕はこういうことをやっていきたいです」「私はこういうことで貢献したいです」という個人目標がある程度のゴールになりがちである。しかし、実際はその先の行動が伴わなければ、意味がない。今回の授業では、あくまで生徒が SDGs を知り、自分自身ができる行動を考えることを一つの終着点にした。次年度以降、開発教育や国際理解教育を教科で行う際には、何らかの行動までを計画に入れていきたい。難しいのは、学習者が考える A という行動と、授業者が学習活動で想像し得る B という行動(目標・ゴール)の差である。授業者は学校という限られた空間、物理的な時間などの制約から、必ずしも学習者が考える行動の支援ができない場合もある。また学習者も授業内のゴール設定が自己満足に終わっている可能性もある。その際に、A と B とを止揚した C という考え方、行動をどのように設定していくか、これは本実践に問わず、高校教育において現実社会と正対した上で、授業者と学習者がどこまでをゴールにしていくのが望ましいのかを私たちは考えなければならない。

10 教師海外研修に参加して

今回、知り合いの先生が以前に教師海外研修に参加した話を聞き、自分の目で海外の教育の様子を見てみたい、日本の子供たちが「普通」と感じているいまの生活と海外の子ども達の生活の違いを確かめたい、という思いで、本研修に参加した。同行した JICA 担当者の方が、「みなさんが見ているのは、あくまでベトナムの“一側面”に過ぎない」という話をしてくださった。ベトナムに行くといっても、滞在期間はわずかであり、訪問する箇所も局所的である。なので、“一側面”のことは常に頭の片隅に置いて現地を見て回り、帰国後の授業でもそのことに留意して指導を行った。

ただ、見聞きしたことは“一側面”であっても直に風土や慣習に触れ、意識的に現地で学んだことは、授業をする際の一つ一つ言葉に、伝える思いに熱が入った。「社会科教員は見てきたように物を言い」という言葉を聞いたことがある。社会科教員は、すべての教科内容に精通することは難しく、時には見えていないものを見てきたように話す必要性もある、といった意味からの言葉だろう。だが、直接体験をする本研修は、改めて見聞きしたことを伝える素晴らしさだけでなく、その難しさも噛み締めることになった。

開発教育を通じて気付いたのは、私たちの生活は平穏であればあるほどに、いまのありふれた日常には無関心で、一方で、それは脆さや不確実さと常に隣り合わせのものであるということだ。それは東京電力福島第一原子力事故が記憶に新しい。私たちの日常は、どこかの世界に歪みがあるから成り立つ面もあるわけで、グローバル化が進んだ今日では、そこに目を背けるわけにはいかない。とりわけ、人口増加や食料危機、環境問題などあらゆる喫緊課題が待ったなしで立ちはだかっている。そういう問題を知り、つながりを意識し、具体的にどのような行動を起こし、どのような結果をもたらすのか。気付きや行動計画だけでなく、アクションを起こして振り返りをするところまで、学校や授業者は行っていかなければならないと強く感じる。教師海外研修に参加した本年度だけでなく、次年度もその後もさらに本分野への関心を持ち続けて、計画的な授業実践をし、生徒達に伝え、考える機会を設けていきたい。

最後に、本研修では、参加しなければ出会わなかったであろう多くの先生方や JICA スタッフ、現地の方々のご厚意に触れた。どの方もそれぞれの立場で、数多くの行動を起こしており、そこでの学びは想像以上に多く、本実践を進めて行く上でも大きなモチベーションになった。今後も、学校種・教科、職業に問わず、情報交換を続けていき、アンテナを高く張って、この分野への勉強を続けていきたいと強く考えている。